

中ソ対立と金日成（一九五六年 一九七二年）：
ロシア外交史料を中心に

著者	下斗米 伸夫
出版者	法学志林協会
雑誌名	法学志林
巻	116
号	2・3
ページ	141-176
発行年	2019-02-22
URL	http://doi.org/10.15002/00023115

中ソ対立と金日成（一九五六年—一九七二年）⁽¹⁾

——ロシア外交史料を中心に——

下斗米 伸 夫

冷戦史において一九五六年は決定的な年であった。ソ連共産党第一書記ニキータ・フルシチョフがヨシフ・スターリンを第二〇回共産党大会で批判したことは多くの共産主義国で連鎖反応を呼び起こした。朝鮮民主主義人民共和国も例外ではなかった。けれどもフルシチョフのスターリン批判に呼応して金日成の「個人崇拜」に対する反対キャンペーンが組織されたことはこれまであまり研究されてこなかった。⁽²⁾

一九五六年八月の朝鮮労働党中央委員会八月総会では、副首相の崔昌益と朴昌玉に指導された高官たちが金日成の個人崇拜に反対する運動を組織したのである。もっとも彼らは直ちに指導部から排除、除名され、四名の高官たちが中華人民共和国に逃亡した。このことは北京とモスクワの当局を驚かせた。というのもスターリン批判に伴って生じた東欧の政治的混乱のようなアジアで最初の混乱となったからである。この事件に当惑したソ連と中国の共産党はアナスタス・ミコヤンと彭徳懷を団長とする合同代表団を平壤の九月二三日の党総会に派遣した。彼らの圧力に当惑した金日成は、九月党中央委員会総会でビッグ・ブラザーズの忠告に従って崔と朴の党籍を回復した。外国の「友人たち」は、金自身の肅清を含むより大胆な措置を要請したのかもしれない。事実彼は権力の座からほとんど追放されそ

うになった。この八月と九月の事件はその後の金日成とソ連、中国との関係に決定的な影響を及ぼした。

皮肉にも北朝鮮の独裁者を救ったのは東欧で一〇―十一月に起こった民主化運動であった。というのも一〇月のポーランドとハンガリーの民衆反乱がモスクワと北京の主要な関心となったからである。これに従ってソ連共産党は世界中の共産党は自立的であると宣言した。このことにより平壤への圧力は減少し、金日成は政治的に延命した。

この八月からの事件は金日成にとってトラウマとなった。九月以降彼はビッグ・ブラザーズに対してより自立と独立を主張し出した。内政面では金は指導部から「偏向者」、可能な対立者を粛清し、高度に権威主義的な政治体制を確立した。これはエリートにのみ限定された動きにはとどまらなかった。社会全体が金の意思に服従し、彼の大義を促進することになった。こうしておおむね「自立」を意味する「主体(チュチュエ)」思想が一九五〇年代末から六〇年代にかけて出現した。⁽³⁾

本論文においては以下、金日成がモスクワと北京との間に生まれた紛争を利用して、いかに彼らの間で策謀をめぐらし、権力を固め、そして対外政策を練ったかを検討する。平壤にとってソ連とは社会主義体制のモデルであり、一九四五年の解放者であり、そして経済的軍事的な支援の源泉でもあった。さらに人民中国は、一九五〇年の困難な時期に北朝鮮のために一〇〇万の人民志願軍を派遣して戦ってくれた「歯と唇」の関係でもあった。朝鮮民主主義人民共和国は社会主義国家を建設するためにはノウハウも資源もなく、このため社会主義隣国の援助に依拠していた。金体制がいかに中国やソ連から食糧や技術的支援を求めていたかは筆舌に尽くしがたかった。

しかし一九五六年八月―九月の事件は、金日成にとっても決定的な要素となった。彼の体制の生存は、北朝鮮の社会主義隣国に依拠していた。それだけに彼らが金をほとんど追放しかかったことは決して忘れることができなかった。こうして彼は、ビッグ・ブラザーズのどちらかに一方的に依拠することなく、その広がる懸隔をうまく利用する方法

を学んだのである。彼は状況にに応じてそのどちらかに、もう一方の犠牲のもとで頼り、他方では国内での現実の、もしくは仮想の敵を系統的に除去することで態勢固めを図った。そして「主体」思想の傘のもとで全社会を厳格に統制したのである。熱狂的な民族主義に鼓舞された金は、むしろ自らの立場の弱さを挺に、独立を維持しようとした。

こうした事情を研究するのに北朝鮮での歴史史料は利用できない。それでも一九五六年から七二年までのロシア東欧の史料が最近は多少利用できるようになり、ソ連や中華人民共和国と北朝鮮との関係を検討する材料になった。こうして東アジアのこの時期を理解するのに、あまり知られてはいないが重要な背景説明をここでは試みたい。

一 八―九月危機までの金日成とソ連新指導部

モスクワと平壤との断裂の起源は、ソ連共産党の一九五六年二月第二〇回党大会でのスターリンの「個人崇拜」批判にのみ由来するものでは必ずしもなかった。それは一九五三年三月スターリンの死に伴うポスト・スターリン期に由来していた。モスクワの集団指導部は、「平和共存」原則で対外政策を行うことにしたのである。社会主義陣営にとっての新しい政策の採用は、西側「資本主義」との戦争はもはや不可避なのではなく、それとの平和的共存は事実可能であるということであった。

だがフルシチョフの平和共存戦略は、アジアの社会主義諸国では全般的に不評であった。朝鮮民主主義人民共和国も中華人民共和国もまだ国家統一という目標を完遂していなかった。北朝鮮にとっては韓国が、そして中国にとっては台湾が、それぞれ米国の圧倒的な影響下にあった。従って、米国を中心とする西側資本主義国との「平和共存」というフルシチョフの新政策は平壤でも北京でも歓迎されなかった。

こうして金日成は、朝鮮戦争が休戦しても、モスクワや北京の期待に反して強硬な内政を遂行し始めたのである。戦後の正常化を実行するよりも、金は戦時期同様の動員体制を継続し、スターリンの一九三〇年代の政策にも似た急速な工業化と農業集団化を実施したのである。この新しい展開に驚いたソ連の専門家達はより穩健な内政政策を勧告した。ビヤチエスラフ・モロトフ外相のようなスターリン主義者も、一九五四年四月に北朝鮮の外相南日にたいし、より国民の物質的水準に注意を払うよう勧告した（A102/10/52/8/66）。しかし金はソ連の忠告に耳を貸そうとはしなかった。一九五三年八月に金日成は彼の急進的な政策に反対した想定上の反対者を指導部から一掃した。特に南労党出身の朴憲永、ソ連派朝鮮人の許哥誼、そして中国派の朴一禹、である。朝鮮労働党内の権力を独占した結果、急進的な内政政策を実行したが、その結果はといえば一九五五年はほとんど飢餓寸前であった。しかしこうした忠告を無視した政策の不幸な結果にもかかわらず、彼は依然として朝鮮労働党綱領を採択し、ここでは「半島南部」を解放するための「北の社会主義的基地」を強化しようとしていた（A102/9/44/9/110）。

これらの主導性は、西側やアジアの資本主義国との平和共存政策を課題とするモスクワにとっては好ましくない報道であった。一九五五年はじめまでにモスクワと平壤とのあいだに猜疑心まで現れた。特にフルシチョフには、金日成の急進的工業化や、必要あれば力を行使しても朝鮮を統一するような朝鮮労働党綱領草案が気に入らなかった。モスクワは金に対し「個人崇拜」を制限し、自分たちのルールである「集団指導」のように他の政治家との権力分与を促した。なかでもモスクワは韓国との平和共存を採用するように迫った。このモスクワの忠告にもかかわらず、金は古い強硬政策に固執し、一九五五年四月には林海大使がニコライ・フェドレンコ外務次官に答えたように、韓国との和解を拒否したのである（A102/11/60/15/3）。

二国間の深刻かつ拡大する懸隔に当惑したフルシチョフは、一九五五年四月に金に対してモスクワを秘かに訪問し、

一九五五年末までに統一朝鮮での社会主義化をめざした朝鮮労働党綱領の採択や内外政策について、ソビエト指導部に相談するよう求めた。朝鮮はまだ統一されてないとして、モスクワはこの綱領案には批判的で、新綱領採択を忘れるよう迫った（下斗米・160⁽⁴⁾）。モスクワは暗黙裏に急進的な「力による」統一を放棄するよう促した。しかし金にはこれは捨てることのできない原則であった。

モスクワにとってのもう一つの関心事は、金日成の農業集団化政策の貧しい成果だった。この結果北朝鮮農村ではほとんど飢饉が生じたのである。モスクワは金の提案した一九五六―六一年の五カ年計画をあまりに野心的すぎると感じていた。この政策履行のために農民にあまりの圧力を加えたからであった。このことから、そうでなくともいつも不足気味の農作物の生産高が鋭角的に降下したのである。金はいつもスターリン型の重工業指向の急速な工業化と、強圧的な手法による農業集団化とを模倣してきた。しかしこのような方法はポスト・スターリンのソビエト指導部からは断ち切りたいと考えていたことに他ならなかった。

さらにソ連指導者は金日成の「個人崇拜」に懸念を示した。一九五五年末までに労働党委員長としての職務と政府の官職との分離を勧めた。モスクワの強い圧力に押され、金はこの批判に従うことを強いられた。モスクワはこの職務を遂行するのを確かめるために新大使としてレニングラードの共産党官僚であったウラジーミル・イワノフを送ることとした（AI02/11/60/7/35）。

しかしまもなくソビエトは、金を繰ることがいかに難しいかを実感した。平壤に戻ってきた金は一九五五年末までに強い民族主義的調子での自立的方针を採用した。事実労働党の一二月中央委員会総会では、ソ連派朝鮮人の鄭律と奇石福とが朝鮮人作家に対するあまりに見下げるような批判の廉で厳しく批判された。金の真の目的とは、余りにソ連派朝鮮人によって型作られ発展した結果、あたかも鋳型となったようなソ連派朝鮮人を主導的地位から追放すること

とだった。金は副首相であった朴昌玉を厳しく批判、罰則を科した (A102/11/60/7/185)。特別の関心を呼んだのはソ連派朝鮮人が権力基盤としていた党中央組織であった。許哥誼は一九五三年七月に追放され、自殺に追い込まれていた。彼の後継者朴永彬もソ連派朝鮮人であって、党の人事任命権に影響があった。朴も一九五五年七月に解任された。かわってパルチザン派の古参幹部で金に忠実な崔庸健が、彼は形式的には「友党」であった民主党委員長で、実際には労働党に支配されていたのだが、副首相と労働党副委員長に任命された。一九五五年一月であった。この動きは金の党内におけるソ連派朝鮮人に対する挑戦の一部であった。一九五五年一月総会でソ連派朝鮮人を排除した結果、金は中国系朝鮮人を政治的には表に押し出したのである。やがては有名となった「主体」イデオロギーの発端とは、朝鮮民主主義人民共和国のイデオロギーと教育面におけるソビエトの影響をそぐ武器でもあった。もっともそれがイデオロギー的に精緻化していくのは一九五〇年代末からである。

二 朝鮮労働党内の外国の影響

フルシチョフの第二〇回党大会におけるスターリン崇拜への批判はこの背景で生じた。この演説は金の対内、対外新方針に対する衝撃的な痛打となった。金体制にとって最も重要だったのは朝鮮民主主義人民共和国と朝鮮労働党内の「外国人」の要因であった。北朝鮮の政治生活にソ連や中国が相当な比重を占めたことは言うまでもない。その歴史の起源は民族解放期にさかのぼる。地政学要因、民族及び経済的影響は、この二つの大国の行使する影響に由来し、朝鮮人民民主主義共和国の内外政策にあらゆる回路を通じて影響を及ぼした。国家建設の初期段階には北朝鮮エリートは基本的にはソ連邦か中国の朝鮮人コミュニティから補充された。幾分かは一九四五年から四八年にかけて韓国か

らもやってきた。平壤では約四七〇人のソ連派朝鮮人が労働党創建と国家建設とに主要な役割を演じた。北朝鮮軍建設も同様であった。

一九五六年の北朝鮮からのモスクワ大使であった李相朝によれば、約五〇〇名の民族朝鮮人共産党員が中国からやってきた。朝鮮人民軍での中国の役割は、特に毛沢東が一九五〇年一〇月に北朝鮮を救おうとして介入した時、最高潮に達した。これに加えて、十数万人以上の韓国人が北朝鮮で働いていた。彼らは一九五三年以降、つまり南労働の指導者で外相だった朴憲永が「アメリカのスパイ」であるとして有罪とされて以降、厳格に統制された（A102/9/44/9/1）。

こうして朝鮮労働党の初期には、外国の勢力の影響が圧倒的であったとしても驚くことはない。ソ連派朝鮮人の許哥誼はソビエト型党建設のモデルを提供したがゆえに「党博士」と呼ばれた。だが粛清された。彼のあとの党書記は再びソ連系の朴永彬であった。平壤での政策決定に占めるソビエトの影響は、党組織と経済でのソビエト・モデルの優位からして当然でもあった。またモスクワは制度建設のテクストやマニュアル、軍事、大規模公共工事、そして食糧にいたるまであらゆる援助を行った。北朝鮮は常に食糧不足だったし、米のような主要産物でのソビエトからの援助は重要だった。

三 一九五六年の影で

一九五六年八月九月事件についての詳細をここで記述する必要はないだろう。というのもすでにこの問題では既述され、また著作が出ているからだ（下斗米、沈志華）。しかしいくつかの論点は注記したい。第一は、一九五六年当

初の、特に公式イデオロギーと朝鮮労働党内でのソ連派朝鮮人の没落にもなつて、指導部内での中国系朝鮮人の比重が漸進的に増大した。一九三〇年代の金日成のゲリラ部隊以来の同志である崔庸健は、同時に一九五六年八月九月の中国系朝鮮人の一味でもあった。すでに見てきたようにこの時の中ソ両党の代表団、少なくとも中国共産党系は金を権力から省こうと試みようとした。中国系朝鮮人は平壤の政治生活に奥深く入り込んでおり、事実ソ連や東欧の大使たちから見ても隠れた存在であった。多くの有名な朝鮮人達、例えば金昌満や林海らは北京に依存していた。こうして労働党内部の中国系朝鮮人の影響は、金日成にとつてもう一つの潜在的脅威となつた。

第二に、フルシチョフは彼の内外の支持者の間で権力を強化しようと努め、こうして彼は一九五七年までに北朝鮮のミニ独裁者と妥協する予定でいた。彼は昨年までの反スターリン・キャンペーンで揺さぶられた共産主義陣営内での調和を恢復するはずであった。北朝鮮の金自身も自分の権力掌握度に自信はなかった。金に批判的であるとされたイワノフ大使と交代したブザノフ・ソ連大使は、金が一九五七年五月にはソビエト側が勧めていた委員長と政府首相との人事の兼職を分離する予定があると知らされていた。副首相の金一が首相職となり、金日成は労働委員長となるつもりであるといわれた。これは明らかにソ連でフルシチョフが党務を、そしてニコライ・ブルガーニンが政府を担当するように分掌されていたことに範を取つたものであった (A102/13/72/5/42)。

しかし一九五七年七月になり、フルシチョフその人がゲオルギーマレンコフ、モロトフ、ブルガーニンといった「反党」グループを指導部から追放し、党と政府の要職を独り占めにした。金日成は瞬時を擱かずこの機会を捉え、フルシチョフの権力独占モデルに従うことにした。この劇的な展開の後、ロシア革命四〇周年を記念して世界の共産党・労働党大会が一九五七年一月にモスクワで開催された。毛沢東と金日成もこれに招待された。

毛沢東はこの時彭徳懐を犠牲にして、一九五六年八月九月の朝鮮労働党内事情への干渉を彭個人の責任に帰し

た。毛はもはや労働党内部に介入する梃子がなかった。さらに一九五六年には彼の内政上の課題は、中国共産党内での不承不承の反スターリン主義から「右派分子」の追放へと移った。こうして毛は彭をスケープ・ゴートとして金との和解に到った。この件以降、プザノフ大使は、毛沢東が彭の件は朝鮮労働党内部への介入に他ならない、「我々はこれからこのような行動はもはやしない」と金日成からいわれた。当時ソ連共産党で同盟国共産党担当だったユーリー・アンドロポフ書記は北朝鮮大使にたいし、前大使の李相朝は分派主義者であるとして、モスクワから遠い都市に所払いとなると請け合った (A102/1372/637)。中国系朝鮮人であった李は一九五六年には金の政敵であった。こうしてモスクワと北京は八月から九月にかけての中ソ合同の圧力を非難することによって、金日成と和解することに熱心であった。モスクワも北京ももはや反スターリン・キャンペーンによって状況を不安定化したくはなくなっていた。

このように一九五八年までに金日成が権力を確保することに緑信号が出た。フルシチョフも一九五八年までに権力を独占し、こうして金日成が個人支配を強めることを批判する個人的な動機はなくなった。金は彼のすべての可能なライバルを指導部から一九五八年三月の党協議会までに追放した。最初の犠牲となったのは中国系朝鮮人の国家元首で言語学者の金料奉であった。ソ連大使館に当時アクセスできた学者李シエンによれば金は朝鮮語をキリル文字かアルファベットに変えようとしていた。これも反逆の汚名を着せられる理由となった (A102/1475/5/109)。

このタイミングはうまく設定された。というのも約五〇万の中国人民志願軍が朝鮮半島から引き上げることを決めたからである。一九五八年二月、周恩来が平壤にやってきて撤退を通告した。⁽⁶⁾ちなみにソ連側はシェピロフ外務大臣が一月に人民志願軍の滞在を希望していた。これは意義深いことであった。というのも親中分子は人民軍内に強固であって、金は自分の権力掌握に自信はなかったたのである。中国軍隊の撤退は中国系朝鮮人の影響の減退につながり、

こうして金の権力は強固となった。

金はモスクワと北京との間に生じつつあった対立を巧妙かつ残酷に利用した。八月九月事件に直接には関与しなかった最高人民会議議長の金科奉、ソ連系の副首相朴義琬らは一九五八年三月の朝鮮労働党協議会（活動者会）において批判された「修正主義者」の標的となった。金の能力に疑問を呈したものは、「分派主義者」、「修正主義者」となり、つまりは「敵」とレッテル張りされた。一九五九年一月のアンドロポフ書記による第二一回ソ連共産党大会報告では、すべてで三九一二名が北で粛清され、除去された。これらの行動は北朝鮮エリートの間で不満を呼んだ。彼らは「反体制的パンフ」を配布したが、ソ連大使館はこれを蒐集していた（A102/14/75/6/64）。

一九五八年一月の中国人民志願軍の撤退と共に、金の党内掌握はますます加速された。ソ連派朝鮮人で内相であった方学世は、ソ連大使館にたいし、一九五八年一月までに中国とソ連出身の著名な反対派人士は逮捕されたと伝えた（A102/14/75/7/469）。方は数万人が調査の対象となったという。その時までにはすべての数万の親中、親ソ分子は、十数万人の北に住む韓国出身者と同様「第五列」であるとされた（Szalontai: 129）。

これらを通じて、北朝鮮では反外国人感情が確固としたものになった。一九五八年までにすべての社会主義国に留学した者は故郷に呼び戻された。モスクワでは幾人かの学生が帰国を拒み、こうして一一名が朝鮮人籍を奪われ、亡命扱いとなった。⁽⁶⁾ 北朝鮮の公安当局は李サンギュという学生が帰国を拒んだとして、一九五九年一月に確保、護送した。ソ連外相アンドレイ・グロムイコはこれらの行動に抗議した。モスクワの抗議に直面した北朝鮮大使李信八はプザノフ大使に「それは不幸だった」と二月一九日、個人的に謝罪した（A102/15/81/7/329）。

四 中ソ対立の影で

一九五〇年代末にかけて中ソ関係の分裂は深刻になった。金日成はこの二つのビッグ・ブラザーズの対立でうまくバランスをとるようになった。一九六〇年までにこの対立はより顕著であけひろげのものとなった。モスクワと北京との対立が顕著になるにつれ、双方を自己の陣営に組み込もうと躍起になった。しかし一九五九年までに金には毛沢東の人民公社運動が余りに冒険的でありすぎるとおもわれた。ことに「大躍進」は破滅的な失敗であり、幾人かの中国系朝鮮人が中国での飢餓を逃れるため非合法に入国してきた。中国での経済的危機は一転、平壤でのモスクワの立場を強めた。

金のモスクワへの傾斜は、北朝鮮が経済支援を求めた必要性によっても根拠づけられた。金日成の反外国キャンペーンにもかかわらず、金日成は五カ年計画（一九五六―一九六一年）でソビエトのテクノロジーと資源を必要としていた。平壤にとって第一義的優位を持っていたのが工業化であった。一九五八年九月の朝鮮労働党組織の再編成の目的は、経済での政治指導、特に重工業での指導強化であった（A102/14/75/4/76）。この観点からは、ソ連の専門テクノロジーは、特に核兵器開発を含め特に賞賛されるべきであった。実際一九五八年までに平壤は、ソ連の核テクノロジーを導入しようとしていた。四月二十八日、李信八大使はソ連の平和利用の核テクノロジーでの支援をグロムイコ大使に真摯に願った（A102/14/75/4/3-5）。

しかし金日成はモスクワの忠実な僕となるには余りに狡猾で、無節操でもあった。一九五八年から一九六一年の間の三度のモスクワ訪問に際しては常に北京に最初に訪中していた。例えば一九五九年一月のモスクワ訪問に際して、

朝鮮人民民主主義共和国がフルシチョフを平壤に招待することに關心があると伝えた。明らかにこの動きは金の長年の願いであるモスクワとの同盟条約締結の願いに動機づけられており、金日成にとってこの条約を結ぶことは最優先課題でもあった (Tkachenko: 16)。

ソ連は、朝鮮人民民主主義共和国とどのような同盟関係にも否定的であった。これは米国が韓国と一九五三年一〇月の段階で相互防衛条約を締結したことにも関わらず、である。フルシチョフはこの地域での「平和共存」の生存可能性にあまりに楽天的であったかもしれない。それでも彼は、少なくとも韓国がこの地で奇襲攻撃した際には共同防衛協定を結ぶことには積極的であった (A102/15/81/7/30)。金の観点からすれば、中国人民志願軍は撤兵しており、何らかの手段が講じられなければならないなかった。一九五九年五月までに、金の政府はソ連代表団の訪問にそなえて準備を開始した。

しかし一九五九年の事情が金の立場に重大な影響を及ぼしていた。収穫は破局的で、目標とされた五〇〇万トンに対し、三二〇万トンしか産出できなかった。食糧不足は、さらに中国での大躍進がもたらした飢饉によって加速された。中ソ関係は歴史上最悪の段階を迎えていたが、それは中華人民共和国結成十周年で一九五九年一〇月に金自身が北京を訪問したときに明らかであった。中国首脳はフルシチョフと台湾海峡問題をめぐって衝突した。金はソビエトの立場に理解を示したといわれているが、フルシチョフと金との会見記録は知られていない。我々が知っているのは、フルシチョフが北京訪問の後、平壤を訪問することが期待されていたのに「政治的理由」でもって破棄されたことである。モスクワは提案された同盟の全般的条文には賛意を示したのだが (A102/15/81/7/86)。金はフルシチョフが平壤に來なかつたことでもいたく傷つた。北朝鮮大使李信八をモスクワから召喚したことは、フルシチョフの平壤訪問を実施できなかったことがあった (A102/18/98/5/47)。

中ソ対立の悪化が、朝鮮民主主義人民共和国での金の権力強化の新たな段階を始めることを可能とした。北朝鮮当局は、東欧「兄弟」国の大使館活動への統制を強化した。ソ連大使李信八が一九五九年末に召喚されたことは既述した。朝鮮労働党の副委員長金昌満による「主体」強化キャンペーンが始まったのは一九五九年一月であった。悪名高い「隣保制度」が始まったのもこの頃だったが、これは住民がお互いを監視することを奨励するものだった。金はこの制度が導入される理由について、ソ連大使に説明して、北朝鮮体制の「社会秩序」を守るものだと語った(A102/18/93/5/385)。平壤に住むソ連市民が大使館に説明したところでは、これら隣保組織は非公開のセミナーや会合を開催し、そこでは自立とか自主といったことが賞揚された。そこでは例えば、「外国製品よりは国産品の方がいい」といったことが強調された。なかでもソ連派朝鮮人は困難な時期を迎えた。特にエリート間での「二重市民権」が問題となり、すべて「外国の」市民達は国を離れるように忠告された。その中には外務省副相(次官)の朴吉龍もあったが、当局と問題を起こした彼はソ連共産党の介入でようやく出国を認められた(A102/16/85/6/169)。最初に一九五五年末に開始され、一九五九年に再開された「主体」キャンペーンは、食糧不足と関係しており、そして中国とソ連という外国の影響に関連付けられた。このキャンペーンが、彼らの影響に抗して働くよう仕向けるべく、食糧不足から関心をそらす目的があった。

一九五八―一九五九年の肅清に際しては、対外部門を構成していたソ連派朝鮮人の影響はその多くを失った。ソ連派朝鮮人の南日外務大臣もまた一九五九年一月には解職され、朴成哲に変わった。彼の解任は、フルシチョフの招待が幾度も失敗したことと関係した。金日成支持者の朴は、朝鮮労働党内の中国派とも関係し、ソ連外務省の特徴付けでは「中国的外交概念の支持者」であった(A102/18/93/13/128)。事実副首相でもあった南日は、最終的に一九六〇年に解任されるまで、独立して行動する権利を奪われ、ソ連大使への接近すら制限された(A102/18/93/5/63)。

対内的にはソ連派朝鮮人を制限しながらも、対外的には、ソ連型工業化を踏襲する以外の選択肢はなかった。中国が内政危機に陥っている当時は、モスクワからの財政的、技術的支援は不可欠であった。副首相朴がソ連大使に伝えるには、工業化の次に大事な一九五九年一月総会の議題として、平壤を近代的な百万の近代都市にすべく、新首都建設の課題が与えられた(A102/20/35/5/476)。明らかに朝鮮を現代化するために北朝鮮は、中国の「大躍進」ではなく、ソ連のモデルを採用したのである。

金がその後親ソ的な立場へ移行したことを示したのは、金が五カ年計画を変更して、フルシチョフ流の「七カ年計画」を採用したときであった。一九五九年三月に北朝鮮政府は新たな一九六一年から六五年の間の第二次五カ年計画を立案していたのだが、金はフルシチョフの七カ年計画にならない、一九六〇年三月に一九六一年から一九六七年の新しい計画を採用した(A102/15/83/32/2)。

一九六〇年にアジアでおきたことは平壤の政治に影響した。日本が米国との関係で新安全保障条約締結をする決定は金日成をしてソ連に近づけた。韓国での李承晩政権の四月崩壊と韓国政局の不安定化は、南部への影響力拡大への新しい政策の採択へと到った。それでも金にはジレンマが生じた。つまり、ソ連の支援は必須であったが、中国もまた無視するには近すぎた。こうして彼は予定されたモスクワ訪問直前の一九六〇年五月に中国を訪問した。ソ連出身の内相方学世は、ソ連大使に、まだ毛沢東の訪問結果が知られていないときであるが、金は北京訪問結果に満足している、と語った(A102/16/85/6/36-7)。金は毛に対し、彼のモスクワ訪問にかかわりなく朝鮮民主主義人民共和国と中国との関係はかわらないと請け合ったように思われる。

金は一九六〇年六月一三日からモスクワを非公式訪問し、一八日まで滞在した。そこで彼は経済問題を話し合ったが、しかし主要テーマは中ソ関係であって、特に一九五六年八月―九月事件の新しい文脈における再解釈であった。

フロル・コズロフ書記は、一九五六年一月のソ連のパーベル・ユージン大使と毛沢東主席との会話に言及し、ここで直前の「八月宗派事件」に関する毛発言にふれたが、毛はここで金を激しく攻撃したのである。副首相ミコヤンもまた彼個人の九月の事件への個人的関与を話し、そして彭徳壊との個人的会話の記録を渡した。そこでは金日成追放の本当の主導性は北京から来たことがほのめかされた。こうして彼はすべての責任を中国側に着せた(A102/16/85/7/5)。(6) ついで金は中国側が、金をもう一人の「イムレ・ナジ」、つまり追放されたハンガリーの首相にしようとしていたことを悟った金はソ連側の一九五六年事件の解釈を聞いて衝撃を受け、しばし無言であった。

平壤に戻ると金は七月朝鮮労働党総会で、毛沢東を厳しく批判し、自分自身を「マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリン」と同列に置くという図々しさがあると鋭く批判した。彼はまた中国は朝鮮民主主義人民共和国を中華人民共和国の「植民地」にしようとしていたと主張した(A102/16/85/7/19)。また金は核問題でもソ連側の肩を持ち、毛がソ連の専門家をあたかも「中国人である」かのように扱ったと批判した。フルシチョフは一九六〇年七月に新しい援助を開始するという確認状をおくった(A102/16/85/7/19)。

しかしモスクワと平壤との差が開いていることも、まもなく明らかになった。というのもモスクワが韓国との平和共存を北朝鮮もめざすべきだと勧めたからであった。モスクワと平壤との間では、韓国を国家として扱うべきかをめぐる長期にわたる論争があった。かつて一九五四年のジュネーブ協定でも北朝鮮が韓国を国家と認めたこともあった。しかしこの一件を省いて、金日成は南一外相とは違って韓国が独立した主権国家であることは認めなかったのである(A102/14/35/8/201)。

一九六〇年八月一五日の朝鮮解放一五周年記念に際し、金日成は韓国に対し「国家連邦」こそ朝鮮統一のモデルとなるべきだと主張したことがあった(下斗米・290)。これこそモスクワが永年北朝鮮に示唆してきたことでもあった。

この提案を金は真面目な提案と思ったのだろうか。東独大使は、この国家連邦の理念がモスクワに由来しているものであり、事実金がこの提案をした途端、フルシチョフはこの理念を擁護したと主張した。フルシチョフのこの提案は、一九六〇年六月二日の全面的かつ包括的軍縮という当時の彼の理想的理念とも一致していた。おそらく彼の全面的かつ包括的軍縮という考えは、朝鮮半島にも適用されるものであった。平壤は形式的にこの提案を支持していたが、実際金日成は卑見ではこの提案に反対であったものと思われる。フルシチョフの提案を支持している様に見せながら、金は「ワシントン・東京」の想定された安全保障体制強化に精神的に反対した。北朝鮮からは「李承晩体制崩壊に伴う不可避免的な民主化の波」を押しつづす効果をもつものに他ならなかった。プザノフ大使がモスクワに報告したところでは、金日成の「国家連邦」への支持という言明とは裏腹に、北朝鮮政府は「全世界の人民は帝国主義者に対する警戒を強め」るべきだと考えていた（A102/20/26/11/3）。つまり金の国家連邦への支持とはフルシチョフへのリッサービスでしかなく、彼の本心は武力による半島統一という過去の政策を現実を変えてなかった。

その間金は再度フルシチョフを一九六〇年一〇月に平壤に招待した。彼はソ連大使に、同盟条約の文案を確認する必要があるからであった（A102/16/85/7/135）。しかし金が失望したことに、フルシチョフは再度一〇月八日になってこの招待をキャンセルした。しかも単に「国際情勢」のために、年内の北朝鮮訪問は難しくなった、と言うものである。再び金は鼻であしらわれた。金は、米ソ関係こそフルシチョフが平壤訪問をキャンセルした理由だと理解した。のち一九六三年になって、金日成はルーマニア大使に対し、二度も北朝鮮訪問を招待したのにフルシチョフは来なかったと信じこませた。こうして金は、フルシチョフが北朝鮮に来なかった理由を、モスクワが北朝鮮にたいして不誠実であることの証だと理解した。

その間、北京は中国―北朝鮮関係をてこ入れすることに抜け目なく利用する主導性を発揮した。一九六〇年一〇月、

中国人民志願軍介入一〇周年に際し、中国は元帥で、副首相を兼ねる賀龍を団長とする高位の代表団を送った。朝鮮民主主義人民共和国は再度と中国との関係改善に傾いた。プザノフ日誌によれば、金日成は「健康上」を理由にこの年のロシア一九一七年革命記念日にソ連大使館を訪問しなかった。実際一〇月革命記念日式典にソ連大使館を訪れた北朝鮮の鄭一龍副首相は社会主義運動での「修正主義的傾向」を批判し、変わって主体思想の有効性を強調した。これはソ連批判を指すコードであった。これらの事情はソ連邦との同盟条約を保留することでの金の立場に影響した。フルシチョフが米国との関係改善に動けば動くほど、金は対ソ関係に懐疑的となった。

五 モスクワ・北京との同盟条約

一九六一年までに、振り子は再び中国に有利に動いた。一九六一年一月四日、金日成はソ連大使にたいし、中国人は隣人であるだけでなく「我々は三年にわたって血を分かち合った」と語った (A102/17/89/5.11)。ソ連はマイナスを補うために、アレクセイ・コスイギン副首相を代表とする代表団にユーリー・アンドロポフソ連共産党書記を加えた代表団を五月五日に派遣した。金が求めたフルシチョフが来られなかったので、コスイギンは金をモスクワに招待し、同盟条約を締結することを提案した。金はこの招待を受け、六月二十九日から七月一二日にわたる日程でモスクワとキエフとを訪問することにした。彼はモスクワとの朝友好協力相互援助条約という同盟条約を七月六日に締結したが、これは米国と韓国とが防衛条約を締結してから八年ぶりであった。

金はキエフで突然、予定された出発日の一日前になってまっすぐ北京を訪問することを決意した。そして中国との同盟条約を一日になって結んだことを指摘することが重要であろう。ソ連との同盟条約から僅か五日後のことだっ

た。中国とソ連とほぼ同時に同盟条約を結んだことは、単に社会主義的連帯の証と見えたかもしれない。しかし真実とはといえば、それは朝鮮民主主義人民共和国とソビエト連邦との関係悪化の徴候に他ならなかった。

事実とはといえば、金は北京と極秘裏に同盟条約交渉を行っており、そして金がモスクワに出発する計画の一日前の二八日には全般的合意に達していたのであった。中国側史料によれば、中国大使の喬曉光がソ連外務大臣朴成哲と六月二七日にあって、条約の中国案を示していた。金は翌日大使と会って中国との同盟条約締結に合意していた。もっともプザノフ大使はこの交渉を全く知らされてなかった。

金がまさか北京と密かに交渉していたことを知らなかったフルシチョフは、金にたいし、もし米ソ関係が改善したらソ連邦と北朝鮮との同盟条約は無効になるだろうと率直にいった。プザノフ大使はこの金のモスクワとキエフ旅行に同行したが、彼の日誌には六月二九日から七月一二日にいたるもっとも重要な時期の記録がロシア外務省史料館には欠落している。金はソ連大使に、七月一〇日になってようやくソ連からまっすぐ北京に向かうと話した。もちろん中国との同盟条約を締結するとは明確にはしゃべらなかった。

中華人民共和国と朝鮮民主主義人民共和国との友好協力相互援助条約はこうして、北京で七月一日に結ばれた。金はどうやらフルシチョフに、計画していた北京訪問については何も言わなかったようである。プザノフ大使日誌などからは北朝鮮の金や他の者が北京との秘密交渉を全く秘匿していたことを示している。プザノフ大使は前任のイワノフ大使よりも遙かに金に対して積極的に対処し、平壤がモスクワ寄りにする点で功績があったが、それでもプザノフは金の秘密交渉を事前に知らされてなかった。

モスクワから平壤に戻ってきたプザノフ大使に、ポーランド大使ユゼフ・ドリグリヤスから、金の北京訪問について事前に知っていたかと問い合わせがあった。プザノフ大使は、

「条約締結後キエフに滞在中、朝鮮側からきたるべき北京訪問について知らされた。金日成との会話で、ソ連に出席する二―三日前に中国大使が北朝鮮外相の朴成哲のところに来て友好協力相互援助条約案を提示した。さらに朴が北朝鮮の党と政府の代表団の北京訪問を要請し、朝鮮労働党はこの招待をうけ入れた」と金は、答えた (A102/17/89/5/26)。

七月十五日、平壤空港で金とプザノフ大使が会見した。プザノフがこの会見について書くには、金は北京の気候がいかに暑かったかをいった。そして「条約は毛沢東と空港で署名した」と語った。この後金日成は、すべて予定されたソ連との条約批准手続きをキャンセルし、そのまま夏の避暑に向かった。七月一七日になって朝鮮労働党の国際部長朴容国にあったが、彼は中国との同盟に関する情報をソ連大使に提供することを拒否した (A102/17/89/5/23)。金が最終的にプザノフ大使と会って中国との条約について説明したのは八月七日になってからであった。

ソ連との条約は、中国とのそれと比較して安全保障の度合いが弱かった。ソ連との条約の有効期限は一〇年であったが、中国とのそれは無期限とされた。ソ連との条約は、どちらか一方の国が実際に攻撃されたときから有効となるとあったが、中国との条約では、両国関係が同盟であると規定されていた。金日成は二つのビッグ・ブラザーズと断続的に密かなゲームを行い、結果的にはモスクワとよりも、北京との有利な交渉をすることができた。

一九六一年秋、北京とモスクワの緊張した関係は頂点に達した。一九六一年一〇月の第二二回ソ連共産党大会において周恩来首相は、ソ連の非スターリン化を公然と非難した。アルバニア問題もモスクワ―平壤関係の指標となったが、アルバニア共産党首のエンベル・ホッジャは一九六一年一月七日に、フルシチョフの平和共存ドクトリンに挑戦した。ホッジャの公然たるフルシチョフに対する逸脱は北朝鮮にとっても訴えるものがあつた。チェコスロバキア大使館が入手した情報では、北朝鮮外務省は非公開会議で、朝鮮側はスターリンの崇拜問題は「ソ連共産党内の内

部問題」にすぎず、ソ連の同志が「アルバニアに対して正しくない態度をとっている」と示唆した(A102/17/89/5/23)。しかし北朝鮮は、ソ連を中国やアルバニアのようには公然とは非難しなかった。一九六二年四月一三日、ソ連大使と会見した金日成はただ共産主義者の統一を語っただけであった(A102/18/93/4/92-3)。

六 北朝鮮の発展途上国に対する態度とモスクワの役割

北朝鮮がソ連邦を公然とは批判せず、モスクワとの関係を完全には絶たなかったのには訳があった。北朝鮮は一九六〇年代には発展途上国の役割を認識し、アジアの発展途上国とマリ、エジプト、ナイジェリアといったアフリカの中立的国家との関係を発展させることに、とりわけ一九六二―六三年には目標としていた。そして平壤のモスクワとの関係が衝突するようになって、平壤はモスクワと相談することなくこれらを進めた。これはもちろん、韓国との関係で北への支持を広げる目的があったが、韓国では一九六一年五月には、クーデターを起こした朴正熙が軍事独裁を確立したのである。平壤は朴正熙の権威主義的政府が他の政府から支持を得ることはないかと計算した。

しかし、平壤が発展途上国との関係を進めようとしたら、モスクワとの関係を取り返しのつかないほど疎外することはできなかつた。北朝鮮は朝鮮戦争時国連を敵としたため、国連が統一問題で中立公平な仲裁者となることはできないとみた。これは朝鮮人民によって平和的に解決されるべきである。しかし毎年九月の国連総会でアジアの平和が課題となるにつれ、朝鮮半島問題にもはや無関心であることはできなかつた。米国が精力的に韓国を国連加盟国にしようとするとき、平壤はその拒否権をソ連邦に依拠しなければならなかつた。国連問題が平壤とモスクワとの関係を、二つの首都同士の関係が緊張したにもかかわらず、結び付けた。北朝鮮は発展途上国の指導者との関係を調整

するには、国連でのモスクワの権威に頼るしかなかった。この点では国連メンバーでなかった中国は力にならなかった。

金日成の健康問題もソ連と朝鮮民主主義人民共和国との関係改善に若干貢献した。一九六二年に金が病気になったとき、プザノフ大使と大使館はソ連の医師を金の治療に送ることで関係改善をはかろうとした。ソ連の監督の下で手術は成功した⁽⁸⁾。ソ連側が金の生命を救ったが、しかしこのことは金が北京と静かに再交渉することを妨げるものではなかった。

一九六二年六月のプザノフ大使の平壤からの離任は一九五七年から六二年までの全般的には良好な関係の終焉を象徴した。プザノフ大使が北の首都を離任したとき北朝鮮外相の朴成哲は、「他の大使達は金の別荘かアパートに招かれはしなかった。金は貴殿（プザノフ大使）を単なる大使ではなく、ソ連共産党代表と考えている」とコメントした（A102/18/93/4/242）。

七 「歯と唇」関係―毛沢東再び

金が北京に急接近した事情は一九六二年一〇月に明かとなったが、中華人民共和国と朝鮮民主主義人民共和国とが国境問題を議論したからである。その結果は一〇月一二日に金日成と周恩来との間に締結された中朝国境条約となった。この交渉も平壤のソ連と東欧の大使館には察知されなかったことは驚くべきことである（A102/18/93/5/186）。

モスクワからの新大使V・P・モスコフスキーが着任し、北朝鮮外相朴成哲にあったのは一九六二年八月一〇日、金日成とは一四日であった（A102/18/93/5/2, 4）。朴が中国系朝鮮人で、金日成に忠実であったのは注目すべきで

ある。経験あるブルガリア大使ゲオルギ・コストフ・ボダノフは、モスコフスキー大使に対し、金日成はフルシチョフが一九六一年のソ連共産党第二十二回党大会で出したフルシチョフの非スターリン化にリップサービスはしているけれど、「本質は何も変わっていない」といった。東欧の外交官からすれば、平壤での反ソ的潮流が強まっていた。

白頭山の国境画定に関する決定的交渉はこうして、まさにその時モスコフスキー大使には伏せられていたのである。大使は前外相で、ソ連派朝鮮人だが金支持派の南日に会おうとし、ようやく九月一五日に会見できた。しかし南はすでに何も知らされておらず、ソ連大使とも自由に話せる立場ではなかった。これに続いたのはブルガリア大使コストフ・ボダノフの離任であったが、それは一九六二年九月、ソフィアから北朝鮮の工作員によって四名の朝鮮学生が拉致されたことへの抗議であった(A102/18/93/5/1)。ちなみに北朝鮮当局は「我々はブルジョワ法には機械的には従わない」と答えた。

北朝鮮当局と東欧同盟国大使館との緊張も高まった。一九六二年一〇月当初ポーランド大使は、関係が「陰鬱である」と特徴付けた。⁽⁹⁾金日成は東欧諸国の差違についてもよく知っており、その差を利用してすらすらした。東独大使クルト・シュナイデウィンドは、当時平壤の政治情勢を的確に掌握していたが、一〇月一日、モスコフスキー大使に、北朝鮮指導部が中国に傾斜していると示唆した。その彼にしても周恩来の平壤到着を知らなかったようである。北朝鮮指導部の中国への傾斜をめぐって、平壤の東欧大使の意見は分かれた。例えばチェコスロバキア大使は金のスターリン個人崇拜批判が本物であると見ていた。しかし一九六二年末になると、北朝鮮と、ソ連および東欧同盟国との関係は顕著に悪化した。鋭い北朝鮮ウオッチャーのシュナイデウィンド大使は、一月二四日にソ連大使に「一九六二年夏、中国と北朝鮮が白頭山の国境問題を交渉し妥協に到達した。中国側は国境問題で妥協したが、朝鮮側は領土よりも政治的理由で妥協した」と言った。この妥協を評価するのは難しいが中国側は領土で妥協することで、北朝

鮮を自らの側に誘い込んだように思われる。

これらの交渉の結果、北朝鮮は真に中国の同盟者になった。東ドイツの大使は、ソ連大使の報われない立場に同情したが、それは金一副首相が、モスコフスキー大使をほとんど半年にわたって金日成に会見させなかったからである。一九六三年六月一日、モスコフスキーは「金日成が病気であり、二―三年間は、特別の医療的観察下にある」と伝えられた。しかし実際には、最終的に大使は金に接見が許されたものの、金は彼に一言も発することなく、他方中国大使とは親しげに歓談したのである (A102/19/97/5/74)。この事件に続いて平壤のソ連大使館には、奇妙な挑発があり、自称「政治的」亡命者が、身を隠した (A102/19/97/5/155)。

武器販売をめぐるモスクワと平壤との間に相互不信があったが、金は経済問題でも策謀をめぐらした。ソビエト側は武器を信用供与で売ろうとしたが、金は武器の無償供与を求めたのである。こうして一九六二年末には両者の関係は危うく断絶しかかった。北朝鮮の民族保衛相 (国防大臣) 金光俠がこの打開のためにモスクワを訪問したが、モスクワは全く譲歩せず、彼は手ぶらで帰国せざるを得なかった。北朝鮮は直ちに中央委員会総会を開いて、そこでは幾人かの代議員が、ソ連との外交関係の断交を言う始末であった (Tkachenko: 29)。これらの背景にあったのは核協力問題をめぐる対立であるが詳細は知られていない。

武器売却問題が追い打ちをかけた。中ソ対立問題では北朝鮮は中国側にたった。一九六三―六四年のあいだ北朝鮮は「修正主義」を批判し、米国との交渉をのぞむ者を非難するのに忙しかった。

八 平壤のモスクワとの不安定なパートナー関係（一九六四—六八）

一九六四年一〇月のフルシチョフの突然の政治の表舞台からの退出は、モスクワと平壤との敵対関係の終焉を意味したかにもわれた。何はともあれ、当面は両国関係についてそのような幻想が支配した。一九七〇年代初めまではモスクワはレオニード・ブレジネフ共産党第一書記（六六年から書記長）とアレクセイ・コスイギン首相の集団指導ができた。アジア外交ではコスイギンが当面主要な役割を演じた。

この間北京は最初の核実験に成功し、これは社会主義陣営でのソ連の指導者としての役割への打撃となった。中国は、モスクワとの関係改善正常化を主張し、最初の相互訪問は周恩来が一九六四年一月に行った。しかし北京のモスクワとの和解の目論見は外れた。周恩来はモスクワでの反中国的な雰囲気横溢から祖国に帰らざるを得なかった。モスクワ—平壤関係は、北京—モスクワとの関係よりはもう少し快活であった。フルシチョフ追放後平壤は反ソ宣伝を止めた。一九六五年二月にコスイギン首相が平壤を訪問したとき、金永南次官がワシーリー・クズネツォフ次官と会談し、完全に一致したというわけではないが、どうやら対話の基盤を見いだすことができた。もっとも両者は合同コミュニケーションを出すときは言葉を合わせるのに苦労した。クズネツォフは「平和共存」といったのに金永南は「帝国主義者の侵略と戦争に対する革命的闘争」といったのである（A102/21/105/2/2-5）。それでも両者は一九六五年三月には軍事・経済協力に合意した。

一九六六年に勃発した中国での「文化大革命」がアジア冷戦の政治的風景に新しい次元を提供した。北京の急進化は、それまで中国を支持してきたアジアの社会主義的分子の中華人民共和国離れを促した。中国紅衛兵による金日成

体制批判などの難点が、北朝鮮と中国との関係を悪化させた。平壤は中国でのコンスタントな偶像破壊的な全般的雰囲気には当惑していた。

この動きが金を再度モスクワと抱き合うような関係に戻した。金も公然と親ソであると公言した。ブレジネフも「朝鮮の同志が中国の道から離れたことは事実」であるとい⁽⁹⁾った。毛の暴力的革命から距離を置くことに加えて、金日成はモスクワに傾斜する別の理由もあった。第一は大韓民国が一九六五年に日本と和解し、工業化を開始した。ソウルが日本のモデルに従って急速に現代化するにつれ、北朝鮮の工業国としてのイメージは打撃を受けた。さらに「米国―日本―韓国」というトライアングルは、安全保障上の深刻な脅威となった。もっともそのような三角関係は、実際には存在しなかったのだが。北朝鮮はどうやらこれら三国関係の協力の度合いを過大評価していた。

北朝鮮がソ連に傾斜するもう一つの理由は、国連での韓国の代表権問題である。もちろん北朝鮮はいつも国連の敵であったが、そしてその指導者はいつも朝鮮統一に向けての独立した道のりの重要性を強調してきた。金とそのスポークスマンは、いつも朝鮮の統一は朝鮮人民全体の事業であり、すべての外国軍隊、つまり米軍は撤兵すべきであると主張してきた。

他方、インドやパキスタンといった中立国は、国連メンバー国として南北双方が加盟すればいいと言いつつ出た。この問題は発展途上国などではたいへん人気ある解決策となった。ソ連邦は国連安保理常任理事国であり、どのような不都合な提案には拒否権を発揮できる。ソ連は、米国と韓国のブロックに対抗して、中立的なアフリカやアジアの諸国とコンタクトし支持を集めるのに際して重要だった。北朝鮮代表団は、イランやアフガニスタンといった発展途上国に旅行するといった基本的な援助にもモスクワに依頼せざるを得なかった。多くの独立したアフリカの諸国から平壤に旅行するにもモスクワ経由だった。こうしてモスクワとの関係は金にとって高度に望ましいことであって、モス

クワに旅することはこの道程に必要でもあった。

しかしながらこの面ではモスクワは金を全面支持というわけにいかなかった。これは一九六三年三月にソビエトの官僚が北朝鮮の大使に説明したように、中立国はもともと受け身的であったことに加え、彼らは北朝鮮にとって国連は敵だといひながら、もう一方で同時に、米軍と国連軍の南部からの撤退を国連総会で決議することを要求することは理解できなかった (A102/19/97/2.1)。

しかし一九六五年の転換する国際関係が北朝鮮とソ連の關係に影響した。一九六五年九月三〇日事件の後インドネシア共産党が壊滅した。これは中国と余りに接近することの危険さを示していた。米国のベトナムへのコミットは、社会主義ベトナムへのビッグ・ブラザーズとしてのソ連の正当性に大きな挑戦となった。コスイギンの役割は、ベトナム戦争エスカレーションへの米国の動きを牽制するのに効果的だった。この文脈でモスクワは平壤との關係修復に準備があった。金炳稷大使がソ連側の相手に、金日成がブレジネフに至急直接会いたがっているといったのは一九六五年末だった (Russiskii Gosudarstvennyi Arkhiv Novoshei Istorii, fond 5/30/475/38)。

コスイギンは、米国にたいするアジア社会主義同盟国での協調した努力を欲した。ソ連首相は平壤を訪れたとき、朝鮮統一問題に触れて、ドゴールなら南北間の仲介に役立つだろうと言った (A102/27/53/2.2)。その頃實際ドゴールの平壤訪問が考えられたが、もっとも実現はできなかった。モスクワはこうして金とのうわべだけのデタントを一時的とはいえ達成できた。崔庸健を团长とする高位の代表団が一九六六年三月の第二三回ソ連共産党大会に招待された。金日成もこのような動きには敵対的でないようにおもわれた。

さらなる動きは一九六六年一二月、ブレジネフが金日成と最初にウラジオストクで会い、そしてモスクワで会って重要議題を話した時やってきた。これらの会議についての史料は利用できなかったが、それでも北ベトナムと米国と

の関係が決定的段階にやってきたことは双方が合意したらしい。中国はまた毛主席の扇動した文化大革命で内戦状態だった。日本は一九六五年に韓国と関係正常化したことは、金体制にとっては脅威だった。こうして金日成の観点にとってもモスクワとのハイレベル協議とある種の実務的関係の確立が必要だった。新しく大使となった金チュンボン(金宗元?)はグルロムイコに対し、ブレジネフとの会見は満足だったといった(A102/23/110/3/7)。最高会議幹部会議長のニコライ・ポドゴヌルイは、北朝鮮新大使の金と話して「文化大革命はただ米国を利する」といった(A102/23/110/3/10)。

しかしこの協力は双方にとって真の敵とは誰かについての誤解に基づいていた。平壤は「日本脅威論」を掲げて「佐藤内閣の右翼保守政権」に対抗するためのソ連の支持を求めるリストを創った(A102/26/52/2/1)。しかし平壤のソ連大使館、特に大使アレクサンドル・ゴルチャコフは、一九六六年六月、「北は日本軍国主義の脅威をいつている、(中略)、したがって朴成哲外相に、グルロムイコの東京訪問の真意伝える必要がある」といった(A102/22/108/13/1)。ソビエト側は日本との和解を狙っていたのだが、それは北朝鮮の反日キャンペーンとは異なっていた。

モスクワは広義の世界世論、特にアジア・アフリカの非同盟諸国や国際組織との関係で平壤をやや低く見積もるつもりであった。代わりにモスクワは、北朝鮮にハーグの国際標準化機構での安定した地位を提供した。グルロムイコはさらに北朝鮮に国際保健機構に参加することを一九七二年に援助した(A102/22/108/13/1)。モスクワはこうして広い意味での世界に関与することを促進した。

しかし金のモスクワとのデータントは幻影でしかなかった。というのも平壤は再度統一問題を急進化し、攻撃的な政治戦術を採用したからである。一九六六年から北朝鮮は軍事力を積み上げ、朝鮮半島を金の誕生日である一九七二年の六〇才誕生日までに統一することを目標とした。一九六七年五月には肅清が行われ、朴金喆ら甲山派(国内パルチ

ザン)が排除され、金支持派が最終的に政治権力を独占した(A102/23/11/12/25)。この粛清では金支持派や甲山派ですらも朴金喆や李孝淳のように不名誉を免れなかった。

膨大なソ連の援助は軍事的準備に差し向けられた。外務副相呉ソクタエは「朝鮮半島での新しい戦争は不可避だ」と主張、「日本の軍国主義精神は衆知の事実だ」、として「であるが故に我が党は経済成長を犠牲にしても国の防衛能力を高めている」と注記した。しかしこのような考えもクズネツォフ外務次官はこのような呉の考えには説得されなかった。かれは「我々にはそのような情報はない」としていわゆる日本軍国主義台頭という考え方を退けた(A102/23/110/3/38)。

こうしてソビエトと北朝鮮の関係は、相互の期待が折り合わなかったこともあって悪化した。一九六六年四月にグロムイコが北朝鮮の朴成哲外相と会ったとき、彼はグロムイコに対し相当の経済力を日米軍国主義の台頭に軍事的に対抗するため振り向けることを説いた。これに対してグロムイコは「我々は彼らに対して外交力で立ち向かう」と答えた(A102/23/111/12/25)。北朝鮮は戦争が不可避とみたが、ソビエト側はこれが絶対により得ないことと素っ気なかった。モスクワ大使の金チュンボンは、ソビエトの出版物が「我々の偉大なる領導者金日成の愛に関する若干の資料」を印刷してくれないことにきつく不満を述べた。外務次官セルゲイ・ピノグラードフは、編集権は当該出版物の編集者に属すると金に伝えた。金大使のモスクワ滞在はこの事件で短縮されたのかもしれない。彼は『ソビエツカヤ・ロシア』紙上で北朝鮮による日本軍国主義批判を印刷できなかったのである(A102/22/107/4/86)。

九 プエブプロ号事件

北朝鮮が対米的に戦術的攻撃性をエスカレーションしたのはこの文脈であった。彼らは一九六八年一月二三日になって米国の「スパイ」船、プエブロを攻撃捕獲した。それは同月青瓦台の朴正熙大統領へのゲリラ攻撃が失敗した直後だった。一九六八年にいかにもソ連―北朝鮮関係がいかに悪化していたかをロシアの歴史家セルゲイ・ラトチェンコが明らかにしている。⁽¹¹⁾北朝鮮指導部は平壤の都市住民の一部を疎開させ、外人大使館員を防空壕に促した。モスクワはこの事件について事前に知らされてなかったし、金の策略を支持しなかった。ソ連外務大臣のグルムイコは北朝鮮外交官姜チュンゴンと一九六八年一月二十九日に会い、ソ連が国連で仲介する努力を伝えた(A102/28/55/2/5)。彼と同様国連事務総長ウータントも同様仲介することに巻き込まれていた。カナダ大使ロバート・フォードもまたモスクワがプエブロ号事件に介入することを促した(A102/28/55/2/7-11)。

他方、金日成は戦闘的ムードにあって、一月三〇日に同盟条約に従ってソ連の軍事援助を求めた。ソ連の党政治局は事件の早期解決を意図し、国防大臣金光俠をモスクワに招請した。二月はじめソ連共産党書記のボリス・ポノマリョフは平壤を訪問し、金を説得して米軍捕虜の釈放交渉を促そうとした。しかしポノマリョフは米朝交渉の内容を金の口からは知らされず、米国から入手する始末だった(Tkachenko: 37)⁽¹²⁾。米国大使のレベリン・トムソンは二月二七日グルムイコと会ってソ連が平壤を統制することを促した(A102/28/55/2/22)。

しかし金はこれらの要請を一切拒否し、プエブロ号乗組員を拘留した。モスクワはこのジュニア・パートナーを扱うことの難しさを実感し、再度確認することになった。つまり、一九六八年とはたんに米国と北朝鮮の関係だけでなく、ソ連と北朝鮮との関係についても危機的な時代となった。ソ連は北朝鮮の最大の貿易パートナーであって、一九六七年から二割増加したが、しかし一九六八年には双方の貿易目標を達成できなかった(A102/29/57/9/1)。

一〇 金日成・中ソ対立と米中和解

ソ連大使としてニコライ・スタリコフが勤務した一九六七年から一九七四年にかけての時期のロシア外務省史料はあまり豊富ではない。モスクワが平壤に対しやや微温的な態度を示したのは、一九六九年三月のダマンスキー島事件に象徴される中ソ対立の激化に部分的には由来した。中ソ対立が軍事的紛争に発展したときは、中ソともに北朝鮮を自国側に引きつけようとした。最高会議幹部会議長ニコライ・ポドゴルヌイが平壤を訪問したこともこのような政治的動きと関連した。一九六九年一〇月一日、毛沢東は中国が北朝鮮と特別な関係となることを望むといった。周恩来が一九七〇年四月にこれ見よがしに平壤を訪れたことは双方とも十分計算済みだった。同年十月一日金日成が秘密裡に北京を訪問することになる。⁽¹³⁾

ソ連と北朝鮮との関係は一九六九年一二月にブレジネフと会見した北朝鮮外相朴成哲は厳しい修辞に固執し、アメリカとの革命戦争にこだわっていた (Tkachenko : 31)。双方は異なった政治課題と期待を持っており、相手とは折り合えなかった。こうして一九七〇年代を通じてソビエトと北朝鮮の関係は難所に乗り上げ、ほとんどのソ連指導者はこの国を訪問することもなかった。一九七〇年一月に朝鮮労働党は第五回労働党大会を開催し、七年計画の総括を行った。対外経済委員会委員長の金敬連は、ニコライ・スタリコフ大使に建設やその他の援助を求めたが、大使は、この援助がほとんど利用されていないと返した (A102/30/59/4/16-21)。一週間では象徴的な会議が開かれ、最高人民会議議長崔庸健と最高会議幹部会議長ニコライ・ポドゴルヌイの一九七一年四月の会議が開かれた。さらには同盟条約十周年記念行事には政治局員のキリル・マズーロフが率いた代表団が平壤に派遣された (A102/31/63/7/

120)。だが、関係は停滞したままであった。

一一 金日成の高麗連邦提案

この間一九七一年に平壤と京城との間で暗黙の接触が試みられた。八月七日、労働新聞で金日成は朴正熙以外ならどのような層の人間とも会うと公言した。最高人民会議の朴ナンウン（南淳？）は、南側に書簡をおくり、朴の「傀儡」政権は危険であって、平和的統一を損なっていると訴えた。一九七二年一月一日づけでされた、自主的平和的統一を願う朴の書簡は、しかし象徴的意義しかなかった。ソ連最高会議の官僚アレクセイ・シトゥコフが一九七二年一月二四日にモスクワで北朝鮮代表団の崔斗光とあった時、崔は、平和的統一の条件が「前向き」であると強調した。新大使となった権クガンも、金がモスクワに来る準備ができていると強調した。この金の動きはモスクワを混乱させた。金の表見上の和解的な論調とは裏腹に、一九七一年八月六日の彼の論文は「レーニンとスターリンの指導性の重要性」を強調することでモスクワに挑む気であった（A102/32/66/10/36）。

その間、一九七二年一月には政治局員候補エス・ラシドフが平壤を訪問した。これは金が自国の経済的苦境を訴え、ラシドフに経済援助を求めたがった。モスクワは不承不承払わざるを得なかった（A102/32/66/11/4）。ラシドフが北朝鮮を訪問したことは、米中和解によって引き金を引かれたアジア太平洋地域での変化する政治環境に対するソビエトの態度を示した。

金は、一九七二年七月四日、高麗連邦提案を提案するという予期しない動きに出た。国家連邦を模索するという考えは一九五四年のジュネーブ会談でも、一九六〇年にも浮上したが、しかし金は一九六〇年以降断固としてこの動き

に反対していた。

一九七一年七月一五日の中国が米国と共存していくという戦略的転換、とくに一九七二年二月のリチャード・ニクソン大統領の訪中は、この転換に決定的影響を及ぼした。金日成の一九七一年八月声明は新しい解決策を示唆したが、しかし金日成と韓国のカウンター・パートがこのように動くことを誰も期待しなかったし、説明もできなかった。一つの可能な説明とは、金日成の六〇才誕生日までに統一するという長期の宣伝に由来しよう。一九六八年に武力統一が失敗した以上、金とその取り巻きは一九七二年までに新しい接近法が必要だった。これは中ソとも米国に対するデタントを求めているときの金体制にとつての民族主義的アピールだった。ソ連外交官M・S・カピツァによれば、幾人かの北朝鮮外交官は中ソとの同盟条約破棄を示唆した⁽¹⁴⁾。外務副相李チョンモクはこのためにわざわざモスクワを訪問、ソ連指導部のこの提案に対する態度を探ろうとした。

しかしこの動きも単なる宣伝的意義を持つものでしかなかった。事実、金は一九七二年一月二八日に新憲法草案を出し、最初の国家首席となった。こうして国家連邦計画とは、朝鮮統一の父としての自己賛美でしかなかった。これは北朝鮮とソ連の関係への相反する反応となった。ソ連共産党書記のコンスタンチン・カトゥシェフが、国家連邦提案後初めて平壤を一九七二年九月三日に訪問した。この時の金との話し合いは報道されていない(A102/32/65/L17)。いずれにしてもこれはある種の示威行動であつて、単なるジェスチャーであつた。韓国も北朝鮮も緊張緩和の大義には熱心でなく、根本的に異なつた関係を構築するつもりはなかった。従つてすぐに混乱した。偽りの期待は実現されることもなかった。モスクワの文献はこの努力がどうして実現されなかったか何も伝えていない。金体制はとうとうともなく失敗の原因を朴正熙とK C I Aの責任に帰しはじめた。モスクワもこの点を予兆しており、南北和解への幻想を持たなかつた。

結論

一九七三年一二月、ソ連外務省は「ソ朝関係の若干の問題」という文書を出した。そこでは、

一、北朝鮮漁民の非法漁労

二、極東に住む一五〇〇〇人の北朝鮮人

三、ソ連国内で、ソ連が社会帝国主義だという中国の宣伝文書の配布

四、ソ連上層に対する実現されない北朝鮮への口頭招待への敵意

もちろんこのリストは、北朝鮮—ソ連関係への根本問題に触れてない。こうして根本問題に触れることなく些末な問題に終始することで、モスクワは平壤との問題をさらに抱えることを回避したのである。

金の体制は一九四五年ソ連赤軍によって権力に据えられた。金は彼の現在の地位が一九四〇年以前の彼の革命運動がもたらしたという後になっての主張にもかかわらず、モスクワは彼が依拠する基本的要因であった。しかし一九五六年のビッグ・ブラザーズに対する熾烈な対立によって、一九六〇年までに彼は、自立した独立的政治家となったということを見ないわけにいかない。彼はモスクワと北京との間の対立をうまく利用し、決定的には一方にコミットすることなく策動することが可能となった。金の同盟戦略とは、国内事情と並んで、中ソの立場のくい違いという国際環境をうまく利用するものであった。

とりわけ深刻なソ連と北朝鮮との対立は、一九五四年のジュネーブ会談での「平和統一」をめぐる懸隔に由来した。

金にとってこの問題は単なる国際問題ではなく、国内の権力闘争にも由来した。金は、統一した社会主義朝鮮を、暴力的手段もふくめ、あらゆる手段を行って創ることを目指した。しかしモスクワにはこのことは大義がなかった。モスクワの計算とは、特に一九六〇—七〇年代を通じて、自己の地政学的利害、そして毛の中国とのイデオロギー的軍事的対抗に根拠をおいていた。

金の対外的ジュエスチャーと動きは時に象徴的であっても内実を欠いたし、具体性を伴わなかった。これは一九六一年のソ連との同盟条約であったし、一九七二年の韓国との高麗連邦であった。しかし米国と日本とが敵対勢力であるとき、そして二つのビッグ・ブラザーズが信頼できないパートナーであった以上、金は韓国との「平和共存」はかりその、そして国内消費用の存在であった。

【注】

(1) なお本稿は二〇〇五—〇七年にかけてカリフォルニア大学サンタバーバラ校の冷戦史研究所（代表長谷川毅教授）で行われたアジア冷戦企画に寄せた下斗米の論文 Kim Il Sung's Balancing Act between Moscow and Beijing, 1966-1972 を訳したものである。今回『法学志林』の岸井教授追悼号に出すに際しタイトルを多少変えた。

(2) *Cold War International History Project Bulletin*, No.16, 2008, p.447-463 (See James Person's introduction: "Pyongyang in 1956" by Nobuo Shimotomai); Alankov, *From Stalin to Kim Il Sung: The Formation of North Korea 1945-1960* (New Brunswick: Rutgers University Press, 2002); Alankov, *Crisis in North Korea: The Failure of De-Stalinization* (Honolulu: University of Hawai Press, 2005); Salontai Balazs, *Kim Il Sung in the Khrushchev Era. Soviet-DPRK Relations and the Roots of North Korean Despotism, 1953-1964* (Stanford: Stanford University Press, 2005). 下斗米伸夫『モスクワと金日成—冷戦のなかの北朝鮮 一九四五—一九六一年—』岩波書店、二〇〇六年（「露訳」二〇一〇年）、また中国史料をも利用した沈志華『最後の「天朝」』上、岩波書店、二〇一六年

(3) 主体という考え方は一九四〇年末の日本の梅本克己らのマルクス主義者間での哲学論争（主体性論争）に由来したかもしれない。当

時別の文脈ではあったが歴史における主体の意味が盛んに議論された。しかし金日成著作集の一九五五年一月の金日成による主体表現は疑わしく、後の表現を外挿したかもしれない『金日成著作集』、第九巻、四二六―三五頁。

(4) この草案によれば統一の基礎となる朝鮮民主主義人民共和国は社会主義段階にあるということだった。しかしモスクワは、朝鮮が統一もされておらず、時期尚早だとして、代わりに南との統一戦線を代わりに進めた。これが労働党に一九六〇年に統一戦線部ができる起源となった。

(5) 沈志華『前掲書』下、三四頁

(6) 下斗米によるその内のひとり、ソ連文学者だった金レーホからの聞き取り(二〇〇八年一月六日、モスクワ)。

(7) ここで利用されたソ連外交文書の内Aで始まるものは、ロシア連邦外交史料館文書 Arkhiv Vneshnei Politiki Rossiiskii Federatsii (AVPRF) である。このなかの fond.0102 opis.16.papka85.del07.15 は fond102 を省略して (A102/16/85/7/5) と略する。ソ連側はフルシチョフが北京から帰国後この一九五六年一月の文書を金に漏らすことを決めていた (*Prezidium TsK KPSS 1954-64, chernoye protokolye zapisi zasedani, stenogrammy, postanovleniya v 3 tomakh* (Moscow: 2003), vol. 1, p. 443)。この会議に出席したプザノフ大使によれば金は毛沢東のこの発言に明らかに衝撃を受けしばし無言であった。そしてソ連大使に「中国人は欠点がある」と語った。金はフルシチョフと四時間話したが、外務省史料館に記録はない。ちなみにソ連共産党で北朝鮮担当だったワジム・トカチェンコは記録を残していた (Tkachenko: 18)。これによると、金は一方的軍縮に消極的で、ソ連との同盟条約調印に積極的だった。フルシチョフは翌年平壤に喜んでいくと回答したが、この訪問は実現されなかった。

(8) A102/18/93/4/183. 金はどうやら腎臓結石を煩い一九六二年五月二十五日に手術を行っている。ソ連共産党は二名の医師を告別手術のために送った。

(9) A102/18/93/5/91. ルーマニアはスターリン問題に微妙であって、ロシアの大国主義には批判的であった。こうして金はルーマニア大使ドリグリヤスに一九六三年夏、一九五八年にソ連系朝鮮人を数名射殺したのは間違いだだったと再検討すら示唆した (A102/19/97/5/84)。

(10) S.S. Radchenko, "The Soviet Union and the North Korea Seizure of the USS Pueblo Evidence from the Russian Archives," *Cold War International History Project Working Paper No. 47, March 2005*, p.11.

(11) S.S. Radchenko, p.11.

(12) このミッションに同行したソ連共産党日本課長イワン・コバレンコはこの同行記録に触れている (イワン・コワレンコ『対日工作の回想』文芸春秋、一九九六年二四九頁)。当時極東の軍管区政治委員だったコワレンコは一九四〇から四五五年にかけて、抑留されて

いた金日成とその部隊（第八八特別旅団）に四―五度国際情勢の講演を行ったという。抑留という言い方に注目したい（二五二頁）。彼の前任者のコビジェンコ日本課長同様、金日成対策は日本工作の一環でもあった。

(13) 平岩俊司『朝鮮民主主義人民共和国と中華人民共和国』世誠書房、二〇一〇年、一一八頁。

(14) M.S. Kapitsa, *Na raznykh parallelakh: zapiski diplomata* (Moscow: Kniga i business, 1996), p.240.